

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

- スポット** ② ミュージアムの収蔵品 51
『宣戦』
- 巻頭
つれづれ** ③ 体の中の放射能を考える
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕
- 館長だより** ⑤ 私たちのアイデンティティとSFからの視点
立命館大学国際平和ミュージアム館長
高杉 巴彦
- ここが
見どころ** ⑦ 芸術の始まりにあるもの／無言館京都館から考える
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕
- ミュージアム
おすすめの
一冊** ⑧ 小林照幸 著
『ひめゆり：沖縄からのメッセージ』（角川文庫 2010年刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
高嶋 正晴〔立命館大学産業社会学部准教授〕
- ミニ企画展
ロビー企画** ⑨ 開催報告 (2011年7月～10月)
- 事業報告** ⑩
- ベルタ・フォン・ズットナー展
 - 2011年度 博物館実習受け入れ
 - インターンシップ受け入れ
 - NGOワークショップ報告
 - アジア太平洋平和研究学会2011年研究大会 開催報告
- ⑬
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第2回 ひめゆり平和祈念資料館
 - ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 岡田 知子
 - 平和へのメッセージ常設展示見学者の感想―
 - 2011年度入館者状況 (2011年4月～10月)、編集後記
 - ミュージアムインフォメーション



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

宣戦



『宣戦』表紙
縦：26.5cm 横：36cm 年代：1942年
寄贈者：矢谷邦雄



『宣戦』4枚目



『宣戦』6枚目

表紙を含め6枚で構成された紙芝居です。タイトルは『宣戦』、発行は大政翼賛会宣伝部、発売は翼賛紙芝居研究会です。今からちょうど70年前の1941年12月8日の真珠湾攻撃に始まった、対米英戦の1周年にあたり発行されたものです。翼賛紙芝居研究会は、その名の通り、戦意高揚を図るため軍や政府の要請のもとに展開した紙芝居の版元です。

この『宣戦』が発行された当時、紙芝居は子供だけでなく、大人に向けて効果的にメッセージを伝える重要なメディアとして広く利用されていました。

紙芝居は1930年頃、祭りや縁日などで行われていた紙人形による芝居を下敷きに考案されたものです。街頭で子供に鉛を売るための客寄せとして上演され、鉛の売人は毎日、貸元から鉛と紙芝居1巻を仕入れて持ち場を廻りました。初期の作品は全て肉筆画で、裏書もなく、1巻は約10枚、上演時間は数分でしたが、1つの物語が数千巻続くシリーズもありました。鉛売りが本来の目的であるため、子供でも現金を使える都市部を中心に展開しました。テレビがなく、ラジオもない家庭のほうが多い時代です。毎日続く絵物語に子供たちは熱狂し「黄金バット」のヒットもあり、紙芝居は瞬く間に子供向けの大衆文化となりました。その影響力の大きさから、警察も検閲を行うようになり、許可を得るための説明書きは紙芝居の裏書の定着につながりました。

また、文字が読めない人にも分かりやすく、一度に複数の人々にメッセージを伝えることができることから教育界や宗教界にも注目され、紙芝居は社会教育や布教にも盛んに利用されました。複数の施設や団体へ配布するために印刷紙芝居が登場し、紙芝居は、大人から子供まで、効果的にメッセージを伝達する新しいメディアとして定着しました。

このような背景の下、1940年代になると軍や政府の宣伝を目的とした国策紙芝居も多数発行されました。山本武利によれば、こうした紙芝居の特徴は「一点あたりの部数が他の版元よりも多い」ことで、特に『宣戦』を発売

した「翼賛紙芝居研究会は、一点あたり約一万七〇〇〇部弱ときわだって多く、「おそらく同社の印刷紙芝居は隣組・職場・学校など全国津々浦々の現場に配布されていたと思われる」(p.54) ものです。

『宣戦』は日本写真技術家連盟が構成にたずさわり、紙面の大半が写真のコラージュです。視覚的なインパクトを強く意識した大人向けのつくりです。現在であれば、デジタル技術を用いた視覚効果のオンパレードといったところでしょうか。

最後は以下のように結ばれています。

…いま、この時、
強者たちは突撃し、
或は、にっこり笑って散ってゆき、
隼は地を蹴って空に征き、
艦列は黒潮の息吹を吸ひ込んで堂々南へ、北へ進む。
あゝ、必殺の忠魂に、胸かきむしらるゝ一億。
・・・撃ちて止まん烈々の決意を以て、忍びて甲斐あるこの苦難を、
にっこり笑って受け持たう。
にっこり笑って受け持たう。

『宣戦』は兵士に死を、国民に苦難を「にっこり笑って」引き受けるよう職場や近隣に呼びかけるための装置でした。

この資料は当時、京都府内の郵便局が所有していたものですが、終戦と同時に廃棄の命令が下りました。しかし、職員がひそかに持ち帰り、保管したため消滅を免れたものです。2011年夏に歴史を伝える資料として当館へ寄贈されました。

(学芸員 兼清順子)

引用・参考文献

山本武利著『紙芝居：街角のメディア』
(2000年、吉川弘文館)

体の中の放射能を考える

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安斎育郎

(立命館大学名誉教授)

■ 体の中の自然放射能カリウム 40

私たちは、毎日の食事を通じて、天然の放射線原子であるカリウム40を約50ベクレル食べているので、大人なら平均して4000ベクレルほどのカリウム40を体内にもっている。つまり、私たちの体の中では、この瞬間にも、毎秒4000個ほどのカリウム40原子がベータ線やガンマ線を出しているのだ。ちょっとムズムズする。カリウム40の半減期（放射能が半分になるまでの時間）は12億5千万年だから、地球誕生以来この放射性原子は生き残り、これからもずっと生き残る。

カリウムは、ナトリウムとともに、細胞の浸透圧の調整役を務める必須の元素だから、毎日の食事から必ず摂取しなければ生きられない。ところがやっかいなことに、天然のカリウム原子の8550個に1個ほどの割合でカリウム40という放射性原子が含まれており、これを避けることはできないのだ。カリウムは主として筋肉中に分布するので、筋肉マンは放射能が強い。私が東京大学にいた頃、2000人ほどの日本人の体内放射能を測定するプロジェクトに参加していた。いろいろな年齢層の被験者をまんべんなく集めるために『団地新聞』に「被験者募集」の広告を出したりしたが、ベッドに10分ほど寝ていれば当時の金額で1800円ぐらいの謝礼が出たから、とくに中年女性の被験者はすぐに予定の定員を満了した。むしろ幼い子どもや高齢者を集めるのに苦労した思い出がある。

■ カリウム 40 の測定でわかったこと

被験者の体の中のカリウム40原子から放出されたガンマ線は体の外まで出てくるので、これを放射線検出器で測定することによってカリウム40の量がわかる仕掛けだが、研究の結果、いろいろ面白いことが分かった。

第1に、男の方が女よりも放射能が強いことだ。カリウムは主として筋肉中に含まれ、脂肪に含まれていないから、これは自然な結果だ。体重1kgあたりのカリウム40の放射能は脂肪が少ない分だけ男の方が強いのだが、脂肪分を取り除いた体重（ファット・フ

リー・マス、FFM）1kgあたりに換算すると、男も女も差がなくなる。同じ人類だから、当たり前といえは当たり前だ。

女性の「脂肪の一生」を観察すると、10歳代半ばまで増え続け（ぼっちゃりしてくる時期）、10歳代半ばから20歳代半ばまではほぼ横ばい（スポーツ選手として活躍する時期）、20歳代後半から50歳代半ばにかけてだんだん増大し（いわゆる「中年太り」といわれる時期）、その後はなだらかに減少していく（失礼を承知でいえば「しなびてくる」時期）。ふいにフランスの作家モーパッサンの『女の一生』と『脂肪の塊』という2つの小説が連想されたが、もちろん何の関係もない。

第2に、力の強い人の方がカリウムの放射能が強い。それはそうだろう。カリウム40が主として筋肉中に含まれている以上、筋肉質の人の方がカリウム40をいっぱい含み、力も強い。進行性筋ジストロフィーの人では、カリウム40の量がだんだん減少することも観察された。

第3に、カリウム40の体内放射能は人間が成人式を迎える前あたりにピークに達し、その後徐々に減少していく傾向を示すことだ。若いと思っていてもピークは大学入学の頃で、あとは少しずつ知らぬ間に衰えていくらしい。ちょっと寂しい。

第4に、体内のカリウム40の放射能の強さは、1年1回波を打つように増減を繰り返していることだ。変動の幅はせいぜい±2%以内程度（全身のカリウム量でいえば±3グラム程度の変動）だが、大学生のグループを毎月1度ずつ7年間測定し続けた結果、カリウム40は晩冬から春にかけて相対的に高い値を示し、晩夏から初秋にかけて低い傾向を示すことが分かった。しかも、よくよく分析してみると、「夏痩せ、冬太り」という体重の増減傾向よりも、カリウム40の増減の方が1週間ほど早く起こっていることもわかった。私が参加していたこの研究の目的は、人間の体内汚染の基礎データとなる自然放射能のレベルや、核実験由来のセシウム137のレベルをきちんと把握することだったので、カリウム40の季節変動はいわば副産物だった。

■ カリウム 40 による内部被曝は？

さて、この瞬間にも体の中でカリウム40がベータ線やガンマ線を出しているとなると、それによる内部被曝が気になる。カリウム40という放射性原子はちょっと複雑な放射線の出し方をする。仮にカリウム40原子が100個あったとすると、平均してそのうちの89個は「ベータ・マイナス崩壊」という現象を起こしてベータ線（＝飛んでる電子）を出しカルシウム40に変わっていくが、残りの11個は「電子捕獲」という現象を起こしてガンマ線（＝エックス線と同じような電磁波）を出し、アルゴン40に変わっていく。このように、放っておくと勝手に放射線を出して別の原子になってしまう性質のことを「放射性」とか「放射能」と呼ぶわけだが、体の中で放出されるこれらのベータ線やガンマ線は内部被曝の原因になる。

では、いったい、カリウム40によって私たちは日常的にどれくらいの内部被曝を受けているのだろうか。体の中で出たベータ線は透過力が弱いので、体の中で吸収されてもろに内部被曝の原因になる。一方のガンマ線は1時間当たり160万本ほども放出されているが、透過力が強いので多くのガンマ線は体を素通りして体外に出て行ってしまいうので、その分内部被曝には結びつかない。ちょっと嬉しい。

しかし、それでもカリウム40による内部被曝線量は、大人も子どもも男も女も、平均して年間0.0002シーベルト程度にはなる。「シーベルト」は被曝線量の単位で、スウェーデンの研究者ロルフ・マキシミアン・シーベルトの名に由来する。人間は一度に1シーベルト以上の放射線を受けると嘔吐や下痢などの急性放射線症に陥る可能性があり7シーベルトぐらい浴びると死亡する恐れがある。しかし、低い被曝線量では、このような急性の放射線障害は起こらず、よく分からないながら、0.1シーベルトぐらい浴びると将来癌や

白血病で死亡する割合が0.5%程度増えるかもしれないといわれている。まあ、人生80年とすれば、カリウム40による内部被曝は合計0.016シーベルト、単純に計算すれば、癌などに陥る割合が0.08%ぐらい増える勘定になる。僅かだが、これは避けられないから観念するしかない。

■ ミュージアム 20 周年記念企画でも放射能をテーマに

ちなみに、福島原発事故後に上梓した『家族で語る食卓の放射能汚染』（同時代社）に、次のようなQ&Aを紹介した。

「1kg 当たり150ベクレルの放射性セシウムを含む茶葉を1回5g 使用し、急須に150ml の湯を入れて夫婦で75ml ずつ、1日3回食事のたびに飲み続けるとしたら、年間どれくらい被曝するか？」

大目に見て茶葉の放射能の50%が湯に溶け出すものとすると、答えは0.000003シーベルト。実際には湯に溶出してくるのは3%ぐらいだというデータもあるし、茶葉が150ベクレル/kg のレベルでずっと汚染していることも極めて考えにくいことだから、内部被曝はもう2桁、3桁小さいかもしれない。

放射線防護の専門家なら、こんな風に「計算すぐで対処できる」が、普通はこうはいかない。私は、原発事故以来、「過度に恐れず、実態を軽視せず、理性的に怖がる」と提言しているが、そのためにも「放射能リテラシー」（放射能についての情報を読み解き、適切な判断ができるための基本的素養）をつけることが大切だろう。2012年に開設20周年を迎える国際平和ミュージアムは、来年春の特別展で分かり易く興味深い展示を通じて放射能についての情報をお伝えすることを計画している。



2011年5月6日、放射線測定器を被災者に寄贈する筆者（左）



2011年原水爆禁止世界大会でも、外国代表と並んで福島の子もたちが舞台上がった。横断幕には「うちにかえりたいよ…」と書いてある。

私たちのアイデンティティとSFからの視点

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 高杉巴彦

■「小松左京展」から

今年2011年、神戸文学館で7月22日から9月25日まで「小松左京展」が開かれました。開始間もなくの7月26日には、小松左京さんご自身が80歳でお亡くなりになり、マスメディアでも大きく取り上げられました。8月6日にはSF作家眉村卓氏による「SFを書き始めたころ」と題する講演会も開催され、私も参加して来ました。

50年前の夏、『地には平和を』でデビュー以来、小松左京さんは大人のためのSFを書き続け、約490作もの長・短編と、70冊ものエッセイ・評論などを発表しています。『地には平和を』では8月15日に戦争が終わっていなかったら、という設定で、「なぜやり直しのきかないこの歴史だけに甘んじなければいけないのか」という問いかけをしています。

「SFこそ文学の中の文学である。そしてSFとは希望である。」としてきた小松左京さんは、1970年の夏に開かれた、世界初の国際SFシンポジウムの趣意書を起草し、その中で大筋以下のように述べています。

——人類は20世紀の前半二つの大戦争を闘い、後半はヒロシマの悲劇という象徴的事件で幕が開け、アポロ宇宙船の月面着陸という画期的出来事で一つの区切りが与えられました。

皮肉にも同じ原理の技術体系によって作りだされたこの事態は、私たちの文明が、今やすべての面にわたって、まったく新しい思考の次元を採用する必要にせまられていることを示しています。農業文明時代の「人間」という概念にか

わって「生物としての人類」という概念を、「国」や「世界」にかわって「地球という名の惑星」という概念を、すべてのものごとの判断の基礎に組み込まざるを得ないほど、科学技術文明は巨大化し、「地球大」のスケールが問題になりつつあります。——

まるで今日の東日本大震災と福島原子力発電所の事故の教訓を語っているかのようであります。小松さんの『日本沈没』はあまりにも有名ですが、『復活の日』の中では核ミサイルでも水素爆弾でもない「生物兵器」によって人類が滅亡していくテーマを描いています。小松さんは人類の総体を問題にし、宇宙的視点から見た地球と人類の存在意味を問いかけ続けました。

■人類と日本人のアイデンティティ

近代文明と技術開発は、産業革命以来、自然を開発し克服する形で進んできました。しかし結局は、地球資源はもちろん生態系の中の動植物の営みに依拠した生成物の恩恵にあずかってきたわけで、人類と地球上の生命と地球全体の持続的発展を保障して行く中で、人類的課題を解決していくことが、未来を築く方向になるのでしょう。

平和ミュージアムの2階の展示には、地球史を1年間に例えた時に人類の歴史はほんの最後のひと時に現れたことを示していますが、その人類が地球を滅ぼすか持続させるかを左右することになってきました。

そして、小松左京さんのいう、「国」や「世界」にかわって「地球」という概念を、すべてのものごとの判断の基礎にしていくにあたって、一人ひとりの人間がそのアイデンティティをどこに置くのかが問題になってきます。このアイデンティティあるいは帰属意識は決してまっすぐ「地球市民」へと向かっていません。

明治国家の成立以降、太平洋戦争の終結までは、国家による集団的アイデンティティに依存し、一人ひとりが自立した自己認識を持つことは、むしろ罪悪とさえされてきました。

戦後は、自由主義・民主主義を標榜することとなり、近代啓蒙主義思想による個としての人間尊重が説かれました。



小松左京展ポスター

しかし社会全体は「高度成長」政策による人口構成の変化で、農業人口とともに旧来の共同体は解体され、それにかわって「会社主義」・経済主義が生活や人生の安定と錯覚され、会社への帰属意識とアイデンティティを持つことに「安心」の材料を得ようとし、したがって、近代思想としての個人主義の中核となるような価値概念は形成されず、埋没させられてゆきます。

一方で20世紀は「イデオロギーの時代」ともいえる状況が生まれ、とりわけ戦後の東西冷戦構造の中で日本はアメリカの同盟国としての独立をはかることによって、その対立の中の一方に身を寄せることでの精神的「安定感」とアイデンティティを得ていた傾向も生まれました。

こうして、家系、血脈や旧来の共同体からは解放されたわけですが、小家族・少子化の進行や各人の「個性」重視の一方で、先祖崇拜心を失い、子孫に記憶され続ける自信もなくなっている状況もあります。

今やドルショックやバブル経済崩壊、世界経済の破綻とともに、「会社主義」も崩壊し、また冷戦構造の崩壊とともに、イデオロギー対立による存在感も薄れ、それにかわる確固たる価値認識を持った「個」の形成もしにくい現状において、日本全国を蔽った広く薄い共通認識の中で、自らのアイデンティティをどう確立するかが課題となってきます。

またアイデンティティ喪失感から、「美しい日本論」や「自虐史観批判」によってアイデンティティを求める動きも見られますが、他に依存したり皆との同一感によって自己の存在を確認するのではなく、自立した大人として、自己や日本人としてのアイデンティティを確立していく道を求める時代となっているのではないのでしょうか。

再び国家的アイデンティティに頼り、ナショナリズムに自己アイデンティティを重ねても、国際紛争の元になんかありません。

■ 沖縄のアイデンティティに学ぶ

先日11月17、18の両日、沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」で日本平和博物館会議が開催され参加協議をしてきました。私は沖縄の人たちが歴史の中で苦悩しながら自らの存在感を形成してきたことに、多くを学ぶことができると考えます。

かつて「琉球」として「万国津梁(しんりょう)」(世界の架け橋)の独自文化をもっていた美しい国が、薩摩の支配下におかれ、明治の「琉球処分」で日本となり、日清・日露時局を経て日本化していく過程をたどり、太平洋戦争で本土の「犠牲」となり、戦後もアメ

リカの施政権下におかれました。1972年にせつかく施政権が日本に返還されましたが、その後も圧倒的米軍基地の島とされている状況があります。

この歴史の中で日本人としてのアイデンティティをどう発見するか。その中で、「美ら島」「美しい沖縄」として日本の中にどう位置付けるか、つまりナショナリズムと自分たちのアイデンティティの折り合いをつけていく営みの継続を感じることが出来ます。様々な立ち位置への苦悩があっても、かえって自立的に自分を見つめ、国家に頼らない「美ら沖縄」のアイデンティティを創っていることに大きな意味を見出だしたいと思います。

■ 地球人類としてのアイデンティティと幻影情報

国家から解放され、自立した「地球市民」として、宇宙や地球的視野からのアイデンティティを人類は取り戻すべきではないでしょうか。アボリジニやファーストピープル(先住民)の方が、プリミティブに自然や宇宙(自然神)と直接交際していた時代があります。現在、自立した自分の観点を確立する必要性が問われているでしょう。

今や、多量の情報が幻影のように装置を使って押し寄せ、人々を幻惑し「安心」と「不安」とが波動的にやって来て自己確立がしにくい状況は、原発事故後の情報操作でも皆が知るところです。1965年に発刊されたSFに筒井康隆氏の『48億の妄想』があります。テレビジョンが「神」になり、テレビ効果がすべての価値の尺度となって、日本中に「テレビ・アイ」が据え付けられ、人々はすべてそれを意識して行動し、愛し死んで行く。プライバシーはなく裁判までがショーとなる世界を描いています。また眉村卓氏は1966年のSF『幻影の構成』で、人々の生活がすべて銀色の小箱「イミジェックス」に支配され、その小箱によって市民の教育も行い、感受性を操作し育成し、娯楽も提供し、メディアとして情報伝達もするという未来社会を描きました。人々はそれ無しには生きられずいつもその小箱に耳を傾け、「平和な気分」に浸っている。それに疑問を持った人物が「偽りの平和」に抵抗するという話です。

「小松左京展」に参加し眉村卓氏の講演を聞いて、1960年代にSF読者として考えたことが今の世相状況の中でよみがえり、あらためて「地球人類の平和創造」課題と自立したアイデンティティについて考える機会となりました。

芸術の始まりにあるもの／無言館京都館から考える

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加國尚志

(立命館大学文学部教授)

国際平和ミュージアムには、戦没画学生の遺作を集めた「無言館京都館 いのちの画室」があります。

「無言館」は、長野県上田市にあり、野見山暁治さんと窪島誠一郎さんが、戦争のため画業半ばにして倒れた画学生たちの遺作を集められた美術館です。遺族を訪ね歩いて、貴重な遺作を集められた経緯はお二人による『無言館はなぜつくられたのか』(かもがわ出版、2010年)に詳しく述べられています。

戦争のため絵筆を折らざるをえなかった若い画学生たちの絵を見ていますと、たしかに「さぞ無念だったろう」「戦争さえなければ、どんなにその才能を開花させたことだろう」という思いにとらわれもしますが、無言館に収められた作品をじっくり見ていると、そうした思いを超えて、もっと深い「何か」が伝わってくるように思います。

たとえばある画家の展覧会で、最初の方に初期の習作が展示されていることがあります。その画家の生涯と作風の展開を知るうえでは貴重なものなのですが、ついもっと後に出てくる円熟期の名作を見たくて、じっくりと見ないですませてしまうことはないでしょうか。私たちは、まだ個性が開花したとは言えない初期の作品を芸術的に未熟なもの、未完成なものと思ひこんでいないでしょうか。

実は、それは一種の錯覚なのだと思います。私たちは、後の円熟期を知っているから、それと比較して、初期の作品を未熟なものとして決めつけてかかっているのです。画家がある年齢に達し、自己のスタイルを確立し、円熟した境地で個性的な作品を量産する時期の作品は、たしかに芸術鑑賞上の魅力を与えてくれますし、美術史的鑑識眼に適うものを提供してくれます。そこには迷いや悩みのようなものは見られません。しかし、最初からスタイルを確立しきって登場する画家というものも存在しません。私たちが芸術家の生涯において感動するのは、自己の作品と呼べるものを求める妥協のない生き様とそれを成し遂げる技量ですが、そのことは、初期の作風をも視野に収めていなくては、そもそも語るこのことのできないものなのです。

他方で、初期の作品にも、すでにその芸術家が芸術へ向かうときの身構えや決意のようなものが色濃く現れているのを感じることができます。自己のスタイルや技法をまだ確立しておらず、習作や模倣、教師や先輩からの影響の段階にいたりといっても、たとえばセザンヌ、ゴッホ、ピカソ、マチス、クレーらの初期の作品は、すでにそれぞれの署名とともに鑑賞され

るだけの個性を示しています。円熟期に達する以前の作品だけが感じさせる何か、円熟期に達することを許されなかった作品だけが感じさせる何か、それが「無言館」の作品からは強い印象とともに迫ってくるのです。

私は哲学の教師ですが、哲学の授業の最初には「哲学とは何か」ということを必ず学生に教えなくてはなりません。そしてその問いは、そもそも自分はなぜ哲学を学ぼうと決意したのか、というところに行き着きます。学生からその問いを突きつけられたら、17～18歳の頃の人生経験や読書経験から答えるほかないでしょう。そしてその年齢の頃に書いたものは、どれほど拙いものであったとしても、この経験の産物であることもまた否定できません。

無言館の作品が感じさせるのは、成熟した作品から受ける感動ともまた違って、「絵画とは何か」「芸術とは何か」という問いかけだけがまだ答えもないままに鋭く迫ってくることであるように思われてなりません。自分はなぜ絵を描くのか、なぜ絵を描くことを選んだのか。芸術の始まりにあるこの問いを自問している若い画学生の息づかいが苦しいほど伝わってくるように思うのです。

戦争によって、絵を描く時間も残り少なく、人生に残された時間もわずかなときに、なぜ絵を描くのか。その問いに、アンケートに答えるようにしてではなく、作品として描かれている対象(人物や物や風景)に答えさせようとするかのような努力が、私たちが彼らの作品の前に釘づけにする力となっているのではないのでしょうか。

「無言館」の作品を、とりわけ、これから芸術や何かを表現することに進もうと考えている学生や生徒に見ていただきたいと思うのはこうしたところからです。あなたには限られた人生の時間をそれに捧げてみたいと思う何かがあるのでしょうか。

戦争が奪い去った未来の可能性。しかし、この奪い去られた可能性は何も残さなかったわけではありません。戦争でさえ奪い去ることのできなかつたもの、それは芸術の始まりにある問いを反復する人間の永続的な努力の営みの価値であり、自然や人間の現れの本質をつかみ取ろうとする情熱であり、生命と幸福の時間を定着させようとした小さな画布たちです。こうしたことを感じるための時間と場所を芸術作品とともに提供することも、平和についての学習において重要なことなのです。

このページは都合によりご覧いただけません

開催報告 (2011年7月～10月)

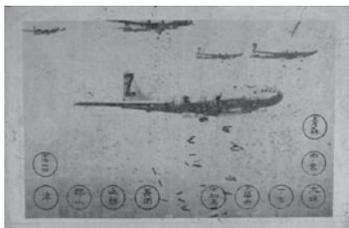
第66回ミニ企画

「むすんで、ひらいて、戦争ってなに？」
—く慶三とキヨ>ふたりを引き裂き、結んだもの—
2011年7月3日(日)～7月18日(月・祝)

立命館大学国際平和ミュージアム、メディア資料室の学生スタッフ3名が、資料整理の経験を活かしたいと、「メディア資料室発信隊」を発足、展示を企画しました。学生達は何度も打合せを重ね、チラシの作成から資料の選定、展示解説の執筆、実際の展示作業まで学芸員の指導を受けながら協力して行い、自分達の展示を実現させました。



学生による展示設営の様子



「むすんで、ひらいて、戦争ってなに？」
展示資料

学生から

メディア資料室の学生スタッフとして資料に触れる貴重な経験を得、その中で感じたことを発信したいという思いが募り、今回展示として形にすることを考えました。

展示の中心として選んだのは、今堀慶三氏が残した資料です。前線と銃後の家族をつないでいた軍事郵便を軸に、アジア太平洋戦争開戦から終戦までを追いました。展示方法も工夫し、伝単(宣伝ビラ)の複製を作って天井から吊るしたり、簡易ポストから葉書を取り出す仕掛けを作り、戦地からの手紙をポストから取り出して読むという擬似体験をしてもらえるようにしました。

今回の取り組みでは、ひとつの展示が作られる工程を経験することができました。また、集まったアンケートには、私達が伝えたかった「戦争が日常である中で、人々の生活や家族のつながり」、「資料を身近に感じる事」などについて書かれた感想が多く、手ごたえを感じました。

(学生スタッフ：関りん)



左から
敦谷友衣さん(文・3)
関りんさん(映像・4)
野間るりさん(文・3)

今号では2011年7月から10月の間に開催しました企画展示をご紹介します。

第67回ミニ企画

「戦時下の食卓—朝・昼・晩—」

2011年7月22日(金)～8月28日(日)

生活の基本となる「食」。戦争によって人々の暮らしは大きな影響を受けましたが、日々の食卓をとりまく事情も例外ではありませんでした。本展では国際平和ミュージアム所蔵の資料50点余りに加え、映像学部の学生達による「お米と戦争」がテーマの映像作品を展示。併せて「米つき棒」体験コーナーを設置するなど、様々な角度から食と戦争の関係を紹介しました。



「戦時下の食卓—朝・昼・晩—」
展示資料

第68回ミニ企画

「ポーレ・サヴィアーノ写真展

FROM ABOVE in 京都2011」

2011年9月13日(火)～10月13日(木)

広島、長崎への原爆投下、東京、ドレスデンでの大空襲、そして南太平洋で繰り返された核実験… FROM ABOVE とは、歴史的体験者たちの「あの日」から未来へと託す想いを伝えるアートプロジェクトです。アメリカ人写真家ポーレ・サヴィアーノ氏が撮影した、被災者の「現在」の肖像写真20点と証言パネルを展示し、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴えました。



「ポーレ・サヴィアーノ写真展
FROM ABOVE in 京都2011」展示の様子

【ロビー企画】

「みてみて～！で届ける国際エール
From Sri Lanka」

2011年8月12日(金)～8月31日(水)

2階ロビー

スリランカと日本の子供達の文化交流に取り組んでいる学生団体 Happy Factory による展示。東日本大震災の発生を受け、スマトラ沖大地震を経験したスリランカの子供達が、日本にエールを届けようと描いた絵画作品20点を紹介しました。



「みてみて～！で届ける
国際エール From Sri Lanka」
展示作品

女性初のノーベル平和賞受賞者 ～ベルタ・フォン・ズットナー

2011年のノーベル平和賞は「女性の安全のため、平和構築へ女性が全面的に参加する権利のため、非暴力で闘った」として、アフリカ、中東の女性3人に授与されました。

今回、女性で初めてノーベル平和賞を1905年に受賞したベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ!』の邦訳(2011年 新日本出版社)が出版されたこともあり、ズットナーの平和に捧げた生涯を紹介しました。

会 期：2011年8月10日(水)～28日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：オーストリア大使館



ベルタ・フォン・ズットナー
(1891年頃)

公開記念講演会

演 題：Toward a Bertha von Suttner Peace Museum in Vienna
(邦 題) ウィーンにおけるベルタ・フォン・ズットナー平和博物館創設に向けて

日 時：2011年8月20日(土)13:30～16:00
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階会議室
主 催：安齋科学・平和事務所
共 催：立命館大学国際平和ミュージアム
講 師：Dr. Peter van den Dungen (ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士)
(平和のための博物館国際ネットワーク(INMP) 統括コーディネーター、ブラッドフォード大学客員講師)
系井川修氏 (愛知学院大学准教授)：「ズットナーの生涯と反戦小説について」
中村実生氏 (愛知学院大学講師)：「文学的な視点から見た『武器を捨てよ!』について」



講演会の様子



展示場の様子



博物館実習の様子

2011年8月10日(水)～28日(日)の17日間に渡り、「ベルタ・フォン・ズットナー展」を中野記念ホールにて開催しました。ベルタは19世紀末から20世紀初めにかけて活躍したオーストリアの作家・平和運動家です。ダイナマイトの発明者、ノーベルの秘書として平和問題に熱意を持ち、反戦小説『武器を捨てよ!』(1889年)を出版、様々な国際平和会議でも活躍しました。1905年、ベルタは女性初のノーベル平和賞受賞者となりました。

平和や人権に対する取り組みについて考えるきっかけになればと企画された本展。オーストリア大使館より借用したパネル19点や直筆の手紙、各国で出版された『武器を捨てよ!』、そして彼女の肖像を刻んだオーストリアのコイン等が展示され、

女性初のノーベル平和賞受賞者となったベルタの、平和に捧げた生涯を紹介しました。8月20日(土)開催の公開記念講演会には約50名が参加され、平和や人権に関するベルタの様々な取り組みについて、理解を深める機会となりました。

なお、本展の設営には2011年度博物館実習の一環として立命館大学生が以下の手順で取り組みました。①オーストリア大使館から届いたパネルの状態チェック、②会場内の衝立パネルの設置、③来館者が見やすい目の高さを実習生同士で話し合いの上決定後ワイヤーフックを使って展示、④入り口のパネル作製と取り付けといった、「人に観ていただく」展示が開幕するまでに、どのような作業があるのかを身をもって経験し、得るものも多かったようです。

博物館実習受け入れ

立命館大学国際平和ミュージアムでは、今年度も博物館実習生を受け入れました。6月から9月、11月から12月にかけて3回、文学部11名、映像学部6名、合計17名の実習生を受入れ、各回5日間又は7日間の日程のうち、半日又は1日は堂本印象美術館で実習を行いました。博物館実習は、学芸員資格取得を希望する学生にとって「総まとめ」の科目です。各自が大学の資格課程科目で得た様々な知識を、実習を通して理解し、さらに学びを深め、博物館の専門職員たる学芸員としてスタートが切れるだけの基本的な素養を身につけることが目的とされていますが、実習で初めて経験する内容も少なくないようです。

実習指導の内容については、可能な限り文部科学省から出された「博物館実習ガイドライン」に沿う形で考え、「いつでも必要な」ミュージアムの維持管理に欠くことのできない内容のものと、この時期でないとできない「旬」な内容のものを織り交ぜることにしています。

「いつでも必要な」実習内容としては、資料の保存環境の管理、資料の貸出・返却、温湿度計の校正、受入資料の整理等、学芸業務が中心となります。館長による講義や、広報、庶務、イベント業務といった館の運營業務にもふれていただき、国際平和ミュージアムの理念や設置目的等を包括的に理解できるようにしています。

「旬」な内容としては、ミニ企画展示「戦時下の食卓―朝・昼・晩―」（7月22～8月28日）展示補助映像制作及び展示改善作業、「ベルタ・フォン・ズットナー展」（8月10～28日）の展示関連作業、「平和のため



展示補助映像制作の様子

の京都の戦争展」資料返却作業、^{くん}燻蒸準備作業などがありました。

特に展示補助映像制作については、昨年度より受入れている本学映像学部からの実習生のみの実習日を設定し、独自の实習内容としました。博物館側が展示内容として希望した「展示補助（解説）映像」を、自分達がこれまで専門的に学んできた内容と、資格課程科目で学んできた内容を使って取り組むことが可能となりました。

1. 展示企画内容の理解（学芸員より説明）
2. 制作する映像テーマの候補をいくつかあげる
3. 制作する映像テーマの決定、内容を組み立てる
4. 2つのグループに分かれて、撮影をすすめる
5. 編集作業
6. ミュージアムで確認、改善箇所を伝える
7. 完成後、プレゼンテーション

この博物館実習内容は学生が主体的にならざるを得ないプログラムになっています。

制作する映像テーマについては、それが来館者にとって、展示を効果的にみせる仕掛けとなること、実習時間内で完成可能かどうかなどは実習担当者話し合いの中で決定します。実習生一人ひとりが持つ知識を出し合い、意見をまとめ、提案し、作業していく過程では、必然的に実習生同士のコミュニケーションが活発となり、熱心に取り組む姿が見られました。「展示をつくる」ことを身をもって経験できる取り組みになりました。

実際の映像を見られた年配の見学者からもご意見などをいただき、今後の参考にしたいと考えています。

他にも毎年取り組んでいる、ミニ企画の改善作業や、展示設営作業でも、実習生が自ら主体的に「考えて」動くことが必要な内容で、実習生にとってはやりがいのある内容となっていたのではないのでしょうか。

（学芸員 岸本菜穂美）



展示設営の様子



^{くん}燻蒸作業の様子

NGO ワークショップ報告

リレーワークショップ：NGO 気候ネットワーク、NGO 日本ナショナル・トラスト協会

第6回 NGO 気候ネットワーク

開催日時：2011年10月21日(金)16：20～18：20
 講師：豊田陽介氏
 (NGO 気候ネットワーク 主任研究員)
 場所：国際平和ミュージアム
 2階ミュージアム会議室
 対象：大学生、大学院生
 参加者：12名
 主催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
 司会 對馬果莉(文学研究科M1)
 石川彩華(国際関係学部4回)
 長瀬令佳(文学部4回)
 瀬川 葵(文学部2回)

第7回 NGO 日本ナショナル・トラスト協会

開催日時：2011年10月23日(日)14：00～16：00
 講師：中安直子氏
 (NGO ナショナル・トラスト協会 推進部長)
 場所：国際平和ミュージアム
 2階ミュージアム会議室
 対象：大学生、大学院生
 参加者：14名
 主催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
 司会 長瀬令佳(文学部4回)
 瀬川 葵(文学部2回)
 對馬果莉(文学研究科M1)
 石川彩華(国際関係学部4回)

今年度の NGO ワークショップは、ミュージアムスタッフの学生が主体的に企画・実施することになりました。

講師を依頼する団体は国際平和ミュージアム常設展示室「平和をもとめて」第2展示室に展示してある12の NGO 団体の中から興味・関心のある団体について意見交換をする中で、決定しました。前期は、ピースポートより講師を迎え、平和教育のプログラム紹介と、ワークショップを実施しました。後期のメンバーは、テーマを「環境保全 NGO シリーズー持続可能な未来を創ろうー」とし、気候ネットワークと、ナショナル・トラスト2団体のリレーワークショップを企画、交渉をスタートしました。ナショナル・トラストは、展示室では紹介していない団体ですが、メンバーの強い推薦があり、初めての依頼となりました。

前期グループよりも準備日数には余裕があったのですが、講師依頼からワークショップ内容の打ち合わせなどを進める作業は思ったよりも時間がかかったようです。広報チラシの作成では、いかに人が手にとってくれるか？を念頭に取り組みました。ゼミの授業や、友人・知人など、より多くの学生に手渡せるよう、チラシの配布にも工夫をこらしました。ミュージアムスタッフとしての主な活動内容は、「ミュージアムの見学者に様々な『平和でない』状況を伝え、改めて平和とは何か？平和な世界の実現のために、自分には何かできるだろうか？と考えるきっかけになる」ことで、今回のようにチームで何かを作り上げる経験はない学生がほとんどでした。ミュージアムスタッフとしての活動経験が2年以上ある学生がリーダーとなり、無事ワークショップをやり遂げました。

第1弾の気候ネットワークのワークショップでは、講師の豊田陽介氏より、気候ネットワーク活動紹介の後、「コンセントの裏側」と題して、グループごとに自宅のコンセントを辿って発電所までの間にどんな施設があるのか？どんな種類の発電所があるのか？をイラストを描いて発表し、エネルギーに関する自分達の知識の「曖昧さ」を自覚し、その後送電網のしくみや、途上国での自然エネルギー利用状況など、エネルギーについて理解を深めることができました。

第2弾のナショナル・トラストのワークショップでは、講師に中安直子氏を迎え、「自然クイズ」で自然界の5つの要素を確認することから始まり、ナショナル・トラストの活動紹介を絡めたワークショップ「どうして自然を守る必要があるのか？」を実施し、グループごとに「自然とは何か」考えるきっかけになりました。今回のリレーワークショップでは、一人ひとりが「エネルギー」と「自然」というキーワードから自身の生活や未来への思いなど、考えさせられるものがあつたようです。

開設20周年を迎える来年度も、様々な NGO 団体を招いたワークショップ活動が展開されることを期待しています。



第1弾ワークショップ
NGO 気候ネットワークの様子



第2弾ワークショップ
NGO 日本ナショナル・トラスト協会の様子

10月14日(金)～16日(日)の3日間、立命館大学、創思館カンファレンスルーム、立命館大学国際平和ミュージアムを会場として、アジア太平洋平和研究学会(APPRA)2011年研究大会が開催されました。

▲ アジア太平洋における 平和研究の再活性化

—アジア太平洋平和研究学会2011年研究大会を終えて—
アジア太平洋平和研究学会事務局長
君島東彦
(立命館大学 国際関係学部 教授)

2011年10月14日から16日まで、立命館大学衣笠キャンパスにおいて、アジア太平洋平和研究学会(Asia-Pacific Peace Research Association, APPRA)の2011年研究大会が開催された。これは、APPRA、立命館大学大学院国際関係研究科、R-GIRO研究プログラム、国際平和ミュージアムの共催であり、日本平和学会と財団法人人間自然科学研究所の協賛を得た。

APPRAは、1964年にロンドンで設立された国際平和研究学会(International Peace Research Association, IPRA)の地域組織として、1980年に設立された学会で、日本人が事務局長をつとめたことも多い。今回は久しぶりに日本での研究大会開催となった。

昨年7月、シドニー大学で開催のIPRA大会時にAPPRA事務局長を引き受けて以来、大会準備を進めてきたが、3/11の事態は衝撃であった。3/11後に日本開催予定だった少なからぬ国際会議がキャンセルされたように、海外のAPPRA会員の中には日本開催の再検討を求める声もあった。しかし、むしろ3/11後の日本において、平和、安全、文明について根本的な省察をするべきだとする意見も強く、予定どおり立命館大学での開催となった。

「アジア太平洋における平和研究の新たな課題」という全体テーマは、3/11以前に決めていたが、研究報告の公募では、フクシマ事故の意味・インパクト、災害救援についての報告希望が数多く寄せられ、3/11以後の平和研究の課題がおのずから浮かび上がってきた。安斎育郎氏(国際平和ミュージアム名誉館長)による基調講演「3/11以後における平和研究の課題」によって、アジア太平洋の平和研究者に対して安斎氏の認識と実践を紹介できたのは非常に有意義であった。



安斎名誉館長による基調講演

APPRA研究大会の参加者は100余名、参加者はパキスタン、インド、ネパール、スリランカ、バングラデシュ、タイ、インドネシア、ベトナム、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランド、台湾、韓国、南アフリカ、パレスチナ、英国、米国、日本の18の国・地域に及んだ。3つの基調講演に加えて、全部で26のセッション、78の報告があった。セッションのテーマを挙げると、フクシマ、災害救援、芸術と平和、人間の安全保障、3/11後の日本の将来、ガンディー、ネパール、非西洋からの国際関係論の再考、非暴力的方法、人権、平和指数、平和運動、平和博物館、平和教育、アジア太平洋地域の紛争、朝鮮半島と日本列島の役割などであり、平和研究の広汎な領域をカバーしていた。各報告の質も高く、セッションごとに充実した質疑応答、議論がなされていた。夜は、3日間とも、レセプションやミーティングがあり、食事をとりつつ、参加者間で活発な交流がなされた。

今回のAPPRA研究大会は、3/11以後における平和研究の課題と論点の整理、アジア太平洋の平和研究者のネットワーキングにとって、一定の役割を果たし得たと考えている。

今回大会の開催は多くの人々の貢献のおかげであり、御礼申し上げたい。とりわけ、ご寄付を賜った財団法人人間自然科学研究所の小松昭夫理事長、立命館大学の安斎育郎名誉教授、山根和代准教授、桂良太郎教授、そしてAPPRA事務局スタッフとして尽力してくださった谷川佳子さんに深謝申し上げます。

▲ APPRAにおける平和博物館の セッションについて

山根和代
(立命館大学 国際関係学部 准教授)

アジア太平洋平和研究学会大会において、平和博物館に関するセッションが二つ開かれた。一つのセッションでは筆者が司会をし、4名が報告した。韓国ソウルにある平和博物館の金英丸氏は、展示や平和教育、平和活動の展開を豊富な写真を見せながら報告した。韓国のハンシン大学のスンウオン・カン教授は、戦争博物館へ行く子ども達と平和教育の意義について報告した。教員は、平和博物館は規模が小さいので戦争博物館へ生徒を連れて行くという。アメリカのエヴァーグリーン州立大学のヘレナ・マイヤー・ナップ教授は、韓国、日本、アメリカにおける博物館の展示を比較しながら報告をした。また筆者は、平和のための博物館国際ネットワークの理事としてネットワークへの加盟

のお誘い、そして平和のための博物館アジア・太平洋ネットワークを創る重要性について報告した。参加者からは音楽をどう平和教育に生かすか、戦争博物館でも平和教育をすることが可能なことなどの貴重な発言があった。



セッションの様子

もうひとつのセッションには桂良太郎教授の司会で、4名が報告した。台湾の曹欽榮氏は、台湾の記念館における日本と台湾の記憶の違いについて報告した。またベトナムの戦争証跡博物館館長のフィン・ヌゴク・ヴァン氏が「ベトナム戦争の結果：毒性化学物質の展示の体験」について報告をした。またパキスタンのビズテクビジネス工科大学のサイド・シカンダー・メディ教授は、「大学における平和のための博物館計画」について報告した。またタイの研究者であるパトポルン・プーソング氏は、タイにおける博物館について報告をした。

今回は平和のための博物館アジア・太平洋ネットワークを創るための会合を持つことはできなかったが、平和研究の中で平和博物館を通した平和教育について報告できたことは幸いであった。

オランダのハーグに本部がある平和のための博物館国際ネットワーク(International Network of Museums for Peace: INMP)の理事会において、2014年における次期国際会議の場所についてメールで討論した。その結果韓国のノグンリ平和記念館で行うことが決定された。そこは朝鮮戦争で米軍により虐殺が行われたところである。

INMPでは団体だけでなく、個人でも会員になることが可能である。関心のある方は次のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.museumsforpeace.org/>

特別セッション 中等教育の学校における 平和教育の課題について

高杉巴彦

(立命館大学国際平和ミュージアム館長)

日本語による特別セッションとして、京都教育大学の村上登司文教授の司会で、中等教育における平和教育の実践と課題が報告され、立命館大学の附属校と関

西学院千里国際高等部における平和教育の発表と、コメンテーター(東海学園大学の浅川和也教授、清泉女学院大学の室井美稚子教授)による提起がおこなわれた。

立命館の附属校(4つの中学・高等学校と1つの小学校)は2006年より、大学教員の協力のもと、平和ミュージアムを中心として平和教育研究会を実施し、実践交流とともに各学校における平和教育の進展をはかってきた。包括的平和教育をベースに地球市民として必要な資質を、発達段階に応じたカリキュラムによって磨いていくという枠組みが発表され、それに沿った各学校での平和教育の具体的実践と学校カリキュラムの中での位置づけが報告された。発表者は立命館宇治高等学校の杉浦真理氏、立命館慶祥中学校の山口太一氏、立命館中学校の田中京平氏であった。

また千里国際高等部の野島大輔氏からは、地球社会の全体像の把握と、国際関係の新しい方向を理解し軍縮教育を踏まえた平和教育、紛争・緊張解決のための「世界秩序の学習」が提示された。

コメンテーターからは、欧米での平和教育が紛争解決能力をつける教育であり、その方がかえって学力を高めることになるとの指摘や、生徒の普段の交流で、日常の平和や仲良くなれることなどの生き様がどう変わったという視点も出され、APPRの場で「平和教育」に関わる大学教員と初等中等教育の教員の連携のあり様が確認された意義は大きいといえる。



左から 野島大輔氏 (関西学院千里国際高等部)
田中京平氏 (立命館中学校)
山口太一氏 (立命館慶祥中学校)
杉浦真理氏 (立命館宇治高等学校)



会場の様子

日本平和博物館会議加盟館の紹介

第18回日本平和博物館会議が11月17日・18日にひめゆり平和祈念資料館で開催されました。



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議（ロゴマーク）

第2回 ひめゆり平和祈念資料館

ひめゆり平和祈念資料館
学芸課長 普天間朝佳

はじめに

ひめゆり平和祈念資料館は、ひめゆり学徒隊生存者とその同窓会（ひめゆり同窓会）によって、1989（平成元）年に設立された。学徒生存者と同窓生の「亡き師亡き友の死へのいたみ」や「戦争体験を伝えることにより悲惨な戦争を二度と起こさないようにしたいという思い」から生み出された私立の資料館である。設立・運営母体は公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団、公的な資金の助成は一切なく、入館料及び寄付金により運営されている。



ひめゆりの塔と資料館

ひめゆり学徒生存者による運営

開館後の運営の主力となったのは「証言員」と呼ばれるひめゆり学徒生存者たちだった。

学徒生存者たちは、開館以来、館内に立って来館者に説明を行ってきたが、このような「語り伝え」の方法は来館者から高く評価されている。また修学旅行で来館する学校等から戦争体験講話の依頼が多く、現在、年間1,000件近くの平和講話を実施している。

学徒生存者たちは、このような「戦争体験の語り伝え」だけでなく、開館以来、様々な事業にも取り組んできた。戦跡をガイドして回る「戦跡めぐり～ひめゆり学徒の足跡」や戦争体験の継承をテーマにした座談会、平和コンサート、朗読会などである。これまで開催した特別展・企画展としては、沖縄の全ての学徒隊を初めて取り上げた「沖縄戦の全学徒たち展」、学徒隊引率教師の苦悩を伝えた「仲宗根政善～浄魂を抱いた生涯展」、学徒生存者たちの戦後を描いた「ひめゆりの戦後展」などがある。いずれの事業も、学徒生存者たちが非体験者である次世代職員たちとともに議論を重ね、実施してきたものである。

当館の特徴として、上記のような「①戦争体験者により設立・運営されている資料館」とともに、「②戦跡観光・修学旅行コースにある資料館」と「③入館者が多い資料館」という点が挙げられる。戦跡観光コース・修学旅行コースにあるため、入館者の90%近くは観光客や修学旅行生である。またそれと関連して入館者が多く、開館以来22年間の年平均入館者数は82万人、年間平均来館校数は2,300校、22年と2ヶ月間で1,800万人の入館者があった（ここ3年間は入館者

数が減少し80万人を割っている。2010年度は69万人）。

次世代への継承

戦争体験の継承が社会的課題になってきた2000年頃からは、次世代へどう継承していくかの模索を始め、①（戦争）証言の映像記録化、②展示リニューアル、③後継者の育成の3つを柱とした「次世代プロジェクト」を立ち上げた。証言の映像記録化は1994年ごろからすでに始めているが、全面的な展示リニューアルを2004年に、証言員の仕事を引き継ぐ非体験者の「説明員」の採用は翌2005年に開始した。

戦後65年にあたる2010年には、初の県外巡回展である「ひめゆり 平和への祈りー沖縄戦から65年」を愛知県ほか5府県で開催し、ひめゆりの戦争体験と平和への思いを県外の多くの方々に伝える機会となった。

本年2011年5月、資料館の運営母体である財団は、公益法人改革に伴う移行申請を行い、公益財団法人として認定を受けた。それを機に、財団の名称が「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」へと変わり、実施公益事業もこれまでの「ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業」に加え、「ひめゆり関連の戦跡壕の調査・保存・活用事業」と「ひめゆり平和研究所の設立準備事業」の2つが新たに設定された。また、さらなる次世代継承の事業として、本年6月には『絵本 ひめゆり』が発行され、12月にはアニメ作品「ひめゆり」（仮称）の完成が予定されている。



参観風景

基本情報

- ◆館長 島袋淑子
- ◆〒901-0344 沖縄県糸満市宇伊原671-1
TEL：098-997-2100
FAX：098-997-2102
- ◆HP：www.himeyuri.or.jp
- ◆開館時間：9：00～17：30
（入館は17：00まで）
- ◆休館日：年中無休
- ◆入館料：大人300円、高校生200円
小中学生100円（20人以上の団体は10%割引）

子どもたちの「常識」をくつがえすガイドを

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 岡田知子

春と秋はミュージアムの繁忙期です。その大きな理由は小・中学校の修学旅行が行われる時期だからです。

さて、子どもたちのガイドをする時、私はできるだけ子どもたちが自分の頭で考えてほしいのでよく質問をします。最初に15年戦争の話を始めるときに「日本は1931年から1945年まで15年間ずーっと戦争してたんだよ。どこの国と15年もしてたんでしょ？」と問うと、すかさず「アメリカ！」と言ってくれる子どもがすべて、といってもいいほど元気のいい返事が返ってきます。「そう。アメリカもしたよね。でもそれは15年のうちの最後の4年間足らずのことよ。そうでなく日本から戦争を仕掛けて行って15年間ずーっと資源を奪い、殺しまくり、破壊していった国があるでしょ？」という、ここで「うーん」と考え込み始めます。そして「分かった！ロシアだ！」というので、「うん、当時ソ連といったけど、それも最後の最後だよ。そうでなくずーっと日本が侵略していった国よ」というと、ようやくどこかから小さな声で「中国？」という声が返ってきます。「えらい！ピンポン！」。

と、このように日本の戦争は？と言えれば太平洋戦争のアメリカしか思い浮かばないのは、実は子どもたちだけでなく大人でもそうなのです。それはなぜか？といえれば日本の近現代史を学校できちんと教えられていないこと（元教師であった私には忸怩たる思いがありますが）、また戦争を描いたドラマや映画でも、日本が中国やアジアに与えた加害の事実はほとんど取り上げられないし、アメリカとの戦争で、初めて日本が外国に攻められて、戦争とはどんなに残酷で恐ろしいものかという被害の事実だけが人々の記憶に残り、子どもたちにも伝えられてきたということがあると思われる。もちろん国家の政策も大きいです。

次によくする質問は徴兵検査のところですよ。20歳になれば戦前の男性は徴兵検査を受けて戦争に行ける体かどうか検査されます。そして男性は「甲・乙・丙の3段階に全員ランク付けされるの」と、男の子たち3人の肩をたたいて言います。できるだけ小さくて弱そうな子にわざと甲と言います。するととても嬉しそうです。そのあと「でもその下に丁というのがあったの」と空間に字を書きます。「さてこの丁は不合格です。不合格といえど？」「戦争に行かなくていい」と答えてくれます。「じゃどんな人が丁になったんだろう？」と聞くと、ここでもまた「うーん」。で、勇気ある子

がちよっと小さな声で「病気？」と答えます。「いいや、病気の場合は^疾といつて、病気が治れば再検査なの。絶対にお前なんか戦争に行っても役にたたんと言われる人よ」というと、ようやく「手がないとか…？」と声があがります。「そうだね。どこかに障害がある人たちのよ」「じゃ障害者は戦争に行かないでいいからよかったじゃん」と誰かが言います。「でもそうじゃなかったのよ。非国民扱いされ『20歳にもなった男子が神様である天皇のために命も捧げられなくてなんで生きているんだ！』とまわりの人たちからいじめられ、差別されて家から出られないでいたという人も多いの。今みんなは“障害ある人も健全な人もみんな平等に生きる権利がある”って学んでいるでしょう？そのように努力しているよね。障害者が生きていけないような時代は2度と来ないようにしようね」と、つい昔の教師臭さが出てしまいます。

また、731部隊の罪業の説明では「細菌爆弾にペスト菌が入れられたんだけど、菌は見えないので入れにくいよね？そこでネズミをいっぱい飼って、ネズミにペスト菌を注射すると、ネズミの全てがペストに感染するでしょう？そのネズミからなにかを採ってこの陶器の爆弾に入れるのだけど、何を入れると思う？」と問うと「心臓」「おしっこ」「糞」「血」といっぱい答えてくれます。「ブー。ここに集められた人たちはとても優秀な医学者・科学者だったから（特に京大医学部の人が多かった）、多くの人に感染させようと、ネズミの血を吸っているノミを採ったの。それを3万匹、この爆弾の中に入れて、飛行機から投下する途中で爆発させると、ノミは軽いから四方八方に飛んで行って、ペストを中国人に感染させたのよ」というと、みんな「きもちわる〜」と腕を抱えて怖がる子どももいます。そして「今みんなは一所懸命勉強して賢くなろうとしているよね？でも優秀な頭を、こんな人を殺すために使うのではなく、社会に役立つものを作るためにいい頭を使ってほしいとおばちゃんは願ってるよ」というと、こっくりとうなずいてくれるかわいい子どもたちです。

「常識」を覆すという点で子どもたちがびっくりするのは、アメリカが原爆を落とす第1の都市が「京都であった」という事実ですが、もう紙幅がないので書けません。

常設展示見学者の感想 (2011年7月~10月)

とてもくわしく満足できましたし、戦争のおそろしさが伝わった。

男性 小学生 和歌山県

写真がたくさんあって、分かりやすかったです。漢字で分からないのがありました。

女性 小学生 京都府

世界の紛争のコーナーはくわしく知らなかったの、学ばされました。根っこには貧困、格差や各国の事情もあるのだろうと思いつつ、それを煽っているのは大国の幾つかだし、日本もその中にいるのではないかと思います。頻繁に来ることは難しいですが、また来年立ち寄りたいたです。

女性 40代 北海道

立命館文学部で近代史を研究しようとしています。日本人の戦争認識は戦後66年を経た今、薄れてきているように思われます。多くの尊い命が失われたあの戦争を、世界に誇る平和憲法を持ち、唯一の被爆国である日本は、これからも国際社会に訴えていかなければいけないと感じました。

男性 大学生 愛知県

自分達が戦争にあったらどうするのか？もっとみんなにこの事を知ってほしいし、大変さをわかってほしいです。

女性 小学生 和歌山県

原爆でもたくさんの人々が犠牲になっている事は知っていましたが、具体的な人数などは知らなかったの、今日ここで知れて良かったと思います。本当の平和が来ることをねがいます。

女性 中学生 滋賀県

ここに来たのは2回目だけど、とても一つ一つのものに興味がありました。とてもくわしい資料や映像があり、調べたりするのに、とても役に立ちました。

男性 中学生 京都府

展示資料に戦争当時の貴重なものが良く保存されている。戦争のメカニズムに関する考察をもっと深くして欲しい。

男性 40代 愛知県

書いてある説明が写真つきでわかりやすかった。音声での解説がもっとあればいいと思いました。

女性 中学生 奈良県

十五年戦争から現代の戦争をわかりやすく解説してあるのが良かった。

男性 50代 滋賀県

あらゆる国籍、年齢層の人々がもっともっと戦争と平和を考えるきっかけになることを祈ります。次の世代への継承をぜひに！！

男性 70代以上 愛知県

このミュージアムに来てあらためて戦争のこわさをしっかし、戦争はいけないという事がわかりました。写真なども色々あり、日本でこんなことがおこっていたんだという事がわかって、いい勉強になりました。

女性 小学生 京都府

ガイドさんたちが、丁寧に教えてくださったのがありがたかったです。時間があれば、もっとゆっくり見たかったです。戦争のない世界にしたいです。

女性 30代 滋賀県

戦時下の国民の生活と各戦争の被害を伝えるコーナーは生活用品や史資料の展示が多くわかりやすい。被害者数など数値が示されているので参考にもなる。最後に子どもの笑顔の写真が展示してあり、何よりも平和の大切さを訴えかけている。

男性 20代 京都府

貴重な資料を見せて頂きました。戦争は悲惨です。本当にこんな事が二度とあってはダメです。このことを心から感じました。

男性 40代

日本が戦争に突き進んでいったプロセスがよく分かった。昔、山本薩夫の「戦争と人間」を見たが、まさしくその様相が展示されていて、関係者の努力に敬意を表します。

男性 60代 東京都

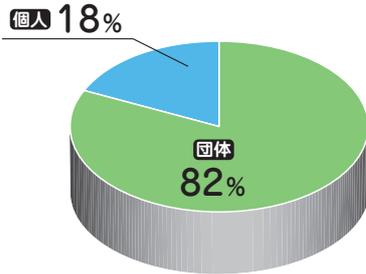
※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2011年4月
～2011年10月
入館者状況

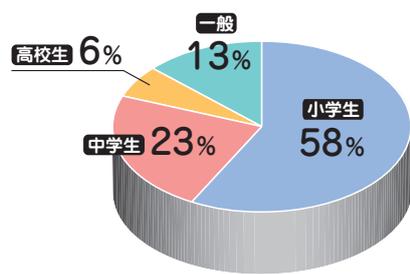
◎開館日数 174日

◎オープン後常設展入館者数累計 779,061名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2011年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	人数計(名)	
総入館者数		2,476	4,603	4,915	2,509	2,971	2,990	9,518	29,982	
特別展	春季特別展 『世界187の顔-生命(いのち)の現場から-』								(5/17～7/10)	7,909
	秋季特別展 『世界報道写真展2011-WORLD PRESS PHOTO 2011-』									7,065
	京都(立命館大学衣笠キャンパス)								(9/21～10/16)	1,765
	滋賀(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)								(10/18～10/31)	2,449
秋季特別展 『ブリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬいた作家-』								(10/22～10/31)	19,188	
小計										19,188
特別展示	写真展『東日本大震災の現場から』第1弾(国際平和ミュージアム 1階ロビー)								(5/17～6/19)	オープン
	写真展『東日本大震災の現場から』第2弾(国際平和ミュージアム 1階ロビー)								(6/21～7/30)	オープン
特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」									(8/10～8/28)	オープン
講演会 ほか	日独交流150周年・DAAD友の会創立25周年記念- DAAD アルムニ会学術シンポジウム「平和コンサート」								(4/16)	170
	奏者: 砂原悟氏(ピアノ演奏)(中野記念ホール)									
	第5回国際平和・人権連続セミナー(びわこ・くさつキャンパス R-103教室)								(5/10)	52
	アレクサンダー・オルブリッヒ氏(大阪・神戸ドイツ連邦共和国領事館総領事)『国際平和構築と科学兵器禁止条約』									
	『世界187の顔』公開記念講演会(衣笠キャンパス 明学館94号教室)								(5/24)	218
	山本宗補氏(JVJA 会員、『fotgazet』創刊号編集長)『世界187の顔から見えてきたもの』									
	DVD上映&レクチャー「カティンの森」(国際平和ミュージアム 2階会議室)								(6/29)	38
	ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ氏(駐日ポーランド共和国大使館一等書記官)									
	特別講演「福島原発から何を学ぶか? -二度の現地調査をふまえて」(衣笠キャンパス 明学館96号教室)								(6/29)	203
	NGO ワークショップ「国際交流と平和-世界とつながる 世界とつなげる」(国際平和ミュージアム 2階会議室)								(7/16)	14
	中沢聖史氏(国際交流 NGO・ピースボート、国際部通訳コーディネーター)									
	第6回国際平和・人権連続セミナー～平和の諸相を見る～(衣笠キャンパス 明学館96号教室)								(7/20)	182
	大田昌秀氏(元沖縄県知事、前参議院議員、大田平和総合研究所主宰)『沖縄戦と在沖米軍基地問題を考える』								(7/22、7/31)	38
	夏休み親子企画「へいむ! ってなに?? 2011」(国際平和ミュージアム 2階会議室)								(8/20)	50
	下見学生会								(5日間・7/27、8/18、8/19、8/23、8/24)	76
	特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」公開記念講演会(国際平和ミュージアム 2階会議室)								(8/20)	50
	ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士(INIMP 統括コーディネーター、ブラッドフォード大学客員教授)									
	『ウィーンにおけるベルタ・フォン・ズットナー平和博物館創設に向けて』									
	ワークショップ「ミリタリーをどうするか-ガルトウング博士とともに考える-」(中野記念ホール)								(9/16)	128
	ヨハン・ガルトウング博士(平和学者)									
	『世界報道写真展2011』公開記念講演会(衣笠キャンパス 存心館801号教室)								(10/4)	171
	豊田直巳氏(フォトジャーナリスト)『3・11を記録し、記憶するために』									
	アジア太平洋平和研究学会2011年研究大会(APPPA)								(10/14～10/16)	881
(国際平和ミュージアム、創思館カンファレンスルーム)										
NGO ワークショップ「環境保全 NGO シリーズ-持続可能な未来を作ろう!」(国際平和ミュージアム 2階会議室)										
第1弾 NGO 気候ネットワーク 豊田陽介氏(気候ネットワーク主任研究員)								(10/21)	12	
第2弾 NGO 日本ナショナル・トラスト協会 中安直子氏(ナショナル・トラスト推進部長)								(10/23)	14	
『世界報道写真展2011』公開記念講演会(びわこ・くさつキャンパス エボック立命21ロビー)								(10/18)	58	
國森康弘氏(フォトジャーナリスト)『3・11被災地、紛争地から看取りまで-命のバトンを受け継ぐために-』										
小計										2,305

編集
後記

二〇一一年度秋季の特別展示『ブリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬいた作家-』を機会にこの希有の証言者の言葉を考えることが多くなりました。

ブリーモ・レーヴィーは、収容所で行われていたことに対するドイツ人たちの態度を「ナチズムへの同意に対する無罪証明に無知を用いた」と批判しています。目の前で起こっていることを知ろうとしない態度が、暗黙のうちにナチスへの同意を形成していたというのです。

東日本大震災と福島原発事故、その被害や放射能の影響について、マス・メディアからはなかなか情報が伝わってきません。しかし、ブリーモ・レーヴィーも言うように、「知ろうとしない」態度は、放射能被害をもたらした国の原子力行政に暗黙の同意を与えることになるのではないのでしょうか。

マス・メディアが提供するのとは異なったルートで事実を伝える場を開くことも、国際平和ミュージアムの重要な社会的役割です。国際平和ミュージアムでは、二〇一二年度、開設二〇周年記念特別展示として、福島原発事故と放射能の問題を取り上げる予定です。この展示では、小中学生など、未来世代への「放射能リテラシー」を軸にした新しい平和教育のあり方を提起したいと考えています。「知ろうとしない」態度を脱して、正しい知識を探究する心こそ、平和教育の出発点であると同時にその目的だと言えます。今後も、国際平和ミュージアムの活動へのご支援をおねがいいたします。

加國尚志

※ 本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展示室

第69回ミニ企画展示

●「第5回立命館附属校 平和教育実践展示」開催中

会 期：2011年10月16日(日)～12月23日(金・祝)
12月11日(日)～12月23日(金・祝) 立命館慶祥中学校・高等学校(北海道江別市)

展示内容

本企画は、初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。国際平和ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の来館者の方々に、改めて平和を考えていただける機会になればという思いで開催しています。

以下は全て終了いたしました。

10月16日(日)～10月28日(金) 立命館中学校・高等学校(京都市)
10月30日(日)～11月11日(金) 立命館宇治中学校・高等学校(宇治市)
11月13日(日)～11月25日(金) 立命館小学校(京都市)
11月27日(日)～12月9日(金) 立命館守山中学校・高等学校(滋賀県守山市)



2011年度立命館中学校・高等学校の展示の様子

第70回ミニ企画展示

●「ミュージアム・この1てん 紙芝居」

会 期：2012年1月11日(水)～1月25日(水)
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム



少國民進軍歌(「ミュージアム・この1てん 紙芝居」)

第71回ミニ企画展示

●第17回京都ミュージアムロード参加企画「建物疎開と京都の町(仮)」

会 期：2012年2月5日(日)～3月20日(火・祝)
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、京都市内博物館施設連絡協議会、京都市教育委員会

第7回ボランティアガイド養成講座受講生募集(予定)

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、今日までに100万人をこえる来館者を迎え、4,500校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示解説を中心に、展示物が語るエピソード、背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。戦後66年が経過した現在、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと思っております。

そこでボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ることを目的とした養成講座を開催いたします。

講座内容は、立命館大学国際平和ミュージアムを設立した趣意、「平和」の意義、展示に関する概要把握(一五年戦争・現代の戦争)、暴力と平和について、ガイドとしての接遇マナー、実習等です。

身近なことからできる社会貢献。ぜひ積極的にご参加ください。

開催日程(予定)：2012/2/12(日)・2/19(日)・2/25(土)・3/3(土)・3/10(土)・3/11(日)・3/18(日)
各回とも3～4時間(約半日)の講座ですが、2/25(土)のみ1日かけて講習を行います。

※2012年4月～7月は、養成講座修了生を対象に実地研修も行います。
詳細は国際平和ミュージアムのホームページにてご確認ください。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

第19巻第2号(通巻54号) 2011年12月9日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsume.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>